

プロシーディング用原稿の提出について

本学会では 2010 年に開催された第 45 回学術総会から演題発表後に本誌 1 ページ分に相当するプロシーディング用原稿を提出することとされております。その際に、なぜそのように決められたかについてアナウンスしておりますが、他の学会ではおそらく要求されていないことなので、プロシーディングを作成する意義についてご不審をもたれる方も少なくないと思われまふ。そこで、以下にプロシーディング原稿を作成提出するに至った経緯及びその理由をあらためて記します。

その一つは学術総会の発表の資料性を増強するためです。毎回多くの発表がなされ、そのためには相応のエネルギーが傾注されているものと思われまふが、その成果が論文として一つのまとまった形で本誌上に残されることがほとんど認められないのが実情です。しかし、英文論文が重視され、二重投稿に厳しい目が注がれている現状では、それも致し方ないのかもしれないと思われまふ。そうしますと、本誌上に残るのは情報の限定された抄録のみとなります。プロシーディングでは記述のスペースを従来の抄録の倍に当たる本誌 1 ページ分確保し、さらに図表及び参考文献の使用も可能としましたので、論文として最小限必要な情報は十分に記述でき、資料価値が増します。

二番目として内容そのものの向上が挙げられます。従来は抄録原稿の締め切り日が演題を発表する学術総会当日よりも相当前であるためか、具体的な内容の極めて乏しいものまで、時として抄録として掲載されてきました。今回、プロシーディング原稿の締め切りを演題発表当日としたことで、研究の成果をより具体的な形で原稿に取り込むことが出来まふ。また、学術総会でのディスカッションを十分に反映すべく、発表 1 週間以内であれば原稿を修正することも可能としましたが、これは本学会が小規模であるがために可能なことです。言うなれば規模の小ささを逆手に取った対応ということができます。

三番目として、従来たまに見受けられたことですが、いわゆるドタキャンをした演題に対して、プロシーディングに載せないことによって正当な対応をとることが出来ることが挙げられます。従来の抄録では、抄録原稿がいわゆる **supplement** ではなく本誌の正式なページ数を取って印刷されていたために、事後から見るとドタキャン演題も実際に発表された他の演題と同じように発表されたものとみなされるようになっておりました。

なお、発表成果としてプロシーディングを残すことについて、将来の本格的な論文執筆の妨げとなるのではないかと危惧される方もいらっしゃると思われまふが、プロシーディングの位置づけはあくまで基本的には従来の抄録と同様であって、二重投稿のおそれはありません。ページ数を 1 ページと限定したのもそれを考慮したものです。

以上から、理事会及び社員総会の議を経て学術総会発表時にプロシーディング原稿を提出していただき、学術総会の記録を学術総会プロシーディングと銘打った本誌第 4 号として年末に刊行することになりました。

この方式については、毎年開かれている理事会及び社員総会において、含まれている情

報量が格段に充実している，とその意義が十分に評価されており，今後とも継続されるものと考えております。

しかしながら，問題点もあります。その最大のものは，学術総会に当たられる側の負担が大きくなることです。そのような負担の増加があるにも拘わらず，プロシーディングを作成刊行しようとするのは，ひとえに学術総会を充実させ，その成果をより広く還元したいと考えるからであります。このことをどうかご理解いただき，プロシーディング原稿を提出されるよう要望致します。